

時代小説
自選集
第十卷

源実朝
浅妻舟

大佛次郎

おさらぎじ ろうじだいしやうせつじせんしゆう
大佛次郎時代小説自選集

第十卷

みなものさねども あさづまふね
源実朝・浅妻舟

昭和四十五年五月十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

目次

源実朝……………三

浅妻舟……………一三五

装丁・題簽
見返し繪
佐中
多村
芳岳
郎陵

源

実

朝

新 樹

閏七月十九日の夜のことから、月の出は遅い。源氏山の背に日が沈んで秋の気配の深い夕方が来たかと思うと、その日一日の不安に怯えて昼の内から戸締りしていた鎌倉の大路小路では、屋内にも灯も点さず話声の外へ漏れるのさえ憚（はば）かって、不安の裡に事態がどう変化するかを窺（うかが）っていた。

土用浪の音が暗い町を筒抜けに、海から遠い山に達している。秋が本式に腰を据え汐が冷たく海が静かになるまでは、日を措いては地軸を揺って高浪の音が町を蔽うのである。人は、これに慣れている筈である。しかし、この夜ばかりは、その重い響を別の心で聞いた。夜に成ったら始まるだろうと取沙汰され、今か今かと人が聴き耳立てて様子を窺っている市街戦の先触れとして、この晩の土用浪の音は無気味に響いた。

続々と物の具を附けた人馬が駆けつけて大蔵の御所から鶴岡に近い相模守義時の屋敷を中心に、道路や社寺の境内を埋めて行くのを人は見ていた。その人数は夜に入ってから解散した様子もなかったが、町は不思議なくらいに、しんとしている。辻には

篝火（かまきり）が赤く燃え、部署に着いた兵が黒く動くのが見えた。篝火のほとりだけが明るくて、数歩離れるとその影が漆のように闇に吞まれて消えるのである。光るのは、兵が取っている得物だけであった。後は浪の音だけが聞えている。闇は両側から屋根の迫った狭い道路を一面に塗り潰している。その上には、樹木でつまれた鎌倉の山々が、いつもよりも手じかにあるように、輪廓だけ黒く浮き上って、満目星の輝く空をかきっている。

合戦は、相模守義時と、名越に御所のある執権北条時政との間に起るのだと伝えられてから、地域として中間にある大町小町の町家は昼間の内にあわてて家を空けて他の場所へ避難した。執権は義時ばかりか、頼朝の夫人で尼御台（あまごだい）さまと言われている政子にも父親だし、將軍の実朝に取っては祖父に当たる重要な地位に在る人である。

頼朝が世を去ってからは、頭を抑える者がないと見られている北条氏の一族の中で、執権の父子がお互いに味方を集めて闘うと聞いたのでは、鎌倉中の人間が飛び上るようになって驚くのは言うまでもない。

ここ数年来、鎌倉の町の道路で、物の具に身を固めた人馬が馳せ合い斬り合って血を流し、館に乱入して火を掛けるというような事変が幾度か繰返された。頼家將軍の子一幡（いちばん）を擁（ひか）して比企一族が小御所に亡びたのは丁度一昨年（いっさねん）の今より少し遅い九月のことで、あの時館をつつんだ大きな火事の名残りに、後の山一円（いちまる）の樹が無惨に赤く立枯れていて夏にも他の山々のように緑に蔽（おほ）われない。

その事件から続いて、將軍だった頼家が伊豆の修禪寺に送られて押込められる時も、何事か起らずには済むまいと町では騒動した。地形が入りくんではいないが、山と山、山と海との間がどこへ行っても三町と隔だっていないような狭い町だから、小さい響も即座に大きな波動を伝えた。

僅か二ヶ月前には源氏の重臣と見られて来た畠山重忠父子が殺戮せられた。親の重忠は在所から出て来る途中、鎌倉に入る前に討手に囲まれて倒された。武勇を知られた豪族だっただけに戦火が今にも鎌倉にも及んで来そうにきびしい警備で鎧武者が御所を中心に辻々に溢れ、もののしい様子に人を怯えさせたのである。

重忠の子、六郎重保は計略で誘い出されて鎌倉へ出て来ていたので、白昼むごたしく殺されるところを眼前に見て来た者が町の人間の中にはいた。美しい若者だっただけに、最初の悲惨な様子が無関係な人の心までも深く動かしした。六月二十二日のことで、朝から蒸暑い日であった。重保は狙われているのが自分だとは知らず、謀叛人が攻め寄せて来た、出会えと触れて歩くのを聞いて、郎従を三人連れただけで、宿から走り出て由比ヶ浜へ駆けつけ、味方と信じて近寄って行った三浦の手勢に不意に取り囲まれ、罪の無実を叫びながら必死に闘ったが、力尽き乾いた砂地に流れる血を吸わして無残な骸を横たえたものだった。

重忠父子に問われるような罪がなかったのだとは、その日の内に、市中でも噂した。人の言うところに換えると、北条一門の人々

の中にも気の毒なことだったと同情している者が多いらしい。もっと穿った話をする者は、義時が重忠を誅して鎌倉に戻ってから、父親の時政の前へ出て、どんな模様だったかと尋ねられると、一族も多い者が親類縁者も連れず小人数で戦場に出てまいったところを見ると、謀叛を企てておるなどとは偽としか見えません。なんだ。何かの誤解か、為にする者の讒訴で御座ったろう。已むなく打果し申したが首を見て年来の交りを思い、涙を催しましたと、下知を下したのが時政だったことも憚らずに答えたので、執権が非常に工合悪るそうに、黙って脇を向いたとも伝えられた。

親と子の、この二人が最近遽かに不仲と成っているのは、六十八歳にも成った父親の若い後妻が隠然と執権の意志を動かすように成っているせいだと取沙汰されていた。畠山父子に謀叛の罪を被せたのも、時政の意志ではなく、後妻の牧の御方が重忠父子を憎んで讒訴したので、義時がまた、自分には継母にあたる牧の御方の策謀を快よく思っていないので、あの場合にも父親に思い切ったことを言ったのだという。

それにしても時政は今も執権の要職に在るし、現在の將軍実朝もずっと以前から時政の屋敷に起居している。父子の間が不和になつているといっても、やはり時政の子の尼御台がある事で、時政義時の間が今日のように突然に、血で血を洗う戦も辞さぬ迄に陰悪な状態になろうとは側近の者も恐らく夢にも予期しなかった事であろう。

この日の事件の発端はこうであった。時政のいる名越の屋敷に

予告なしに、長沼五郎宗政、結城七郎朝光、三浦兵衛尉義村、天野六郎政景などが揃って来て、尼御台の仰せだからと言って、將軍の実朝を迎えに來たのである。尼御台の政子は、自分の娘だった、賴朝の夫人と成ってからは、公の關係では時政も下知を受ける地位に在る。尼御台の仰せと聞いて時政は承知した。承知して人を遣つて実朝にも沙汰を伝えてから、時政は並の場合とは異なる使者の人数といひ屈強の者を揃えた人選といひ、賴朝の伊豆で旗を上げた時から附いて六十八という年輪を加えた古強者が、突如として何とも言えず無氣味な陰惨な表情となり、自分よりは遙かに年下で体格と氣力と、いざと成つて組打つた時の腕力では当代でも有数と見るより他はない上使の面々を、じろりと見廻したのであった。

所詮は愚痴には過ぎなかつた一語が、緩んで唇が垂れ下つた老人の口から、その時、漏れた。

「小四郎（義時）が、なんで、自分から出て來なんだ？」

義時が席にいたら骨を刺すように痛烈に響いた筈のこの皮肉無骨な上使の面々には殆どその意味も通じなかつたように見えた。

やや年長の三浦義村が取做し顔に言い出ただけである。

「相州（義時）は御承知御座るまい」

老人は、銀のような白髪頭を振立て、遽かに面に朱をそそいで激しく言つて出た。

「相州が存ぜぬとか？」

爽やかな衣摺れの音がして牧の御方がそこへ姿を見せた。陶器の肌のように白く、皮膚が冷たく見える美貌が、このひとに目立つ特徴であった。夫とは三十の年齢の隔たりがある。時政の態度が突如として一変したのは、この若い妻が席に現れたのを見た刹那からであつた。烈しくて辛辣だった氣鋒までが折れたように挫けて見えただけでなく、年寄臭く力なく成つた顔に、たゆたゆと、遽かに不安の心が現れ初めた。

この若い妻は、將軍を弑しても自分の子供や女婿を權力の絶頂に押し上げようと冷静の裡に아가いている女であつた。誰よりも時政がそれを知つていて、三十年も年齢の隔たりある女の悍しい熱情や野心をおのれのものにして置く為には、時政が何事もその言葉に譲らねばならぬ習慣であつた。女としては氣性が烈し過ぎ、おのれの子供のこととも成れば、前後もわきまえず我意を貫く性質なのである。

御苦労と鷹揚に挨拶してから牧の方は言い出た。

「尼御台の御使者に御座りますと？」

言外に、尼御台は当然に義理として自分の娘分と言おうとしてゐるのが感じられる品位の備つた声音であつた。

時政は狼狽した色で、言い出した。

「尼御台が……権中將殿（実朝）を見たいとお言いやる。これは、やらねばなるまい」

何気ないようにそう言つてから、それだけのことの結果を時政も暗憎として見た。

自分たちの心の秘密の方向を、義時が、どの程度に感覚してい

るのか？ 底の底まで看破っているとあれば、ここで実朝を出してやるのは、義時の手中に握られて再び戻らぬということになり、もっと直接で最悪の場合は、自分たちの破滅を賭して闘うことに成る。將軍を自分の手もとに置いていかどうかということは、その時、形勢を左右するのに致命的に重大な事の岐れ目と成るのである。人生の後半に到って、遅れて征夷大將軍右大将の勇として権力の頂きに登ったが、前半生は頼朝に随身して石橋山の敗戦から初めて苦しいこと苦しいことばかり多年統けて嘗めて来た男であった。老いても時機を見る目はなお曇っていない、自分の下知一つで起って動く頼みになる人数のことを咄嗟に腹中に案じた。時政も孫の頼家まで殺させた男である。

数分後に近侍の者が廊下に出て来て、事ありげに時政に密談を求めたので、立つて行って聞いた。御所の堀外は相州殿の鎧武者で埋められていますと言うのである。最早計算の下しようのない自分の運命を感じながら、老人は、さりげなくもとの席へ戻って来た。

坐りながら、

「小四郎めが、何か誤解をしている」

と、これは、まだ打つ手もあらうと喘ぎながら、自然と、老人らしく出た切端詰った愚痴であった。

「おこと」

と、牧の方に、

「何かと邪魔に見えるのは、年寄の常じゃ。阿呆らしい。伴どもが揃って、俺を何としようとか……」

どっかと坐って老人は髪は白く人間として如何にも立派であった。使者たちも、それを感じたのである。相州の觀察こそ、恐らく邪推ではなかったかと。ところが相手は芝居の盛綱陣屋の場に陣羽織を着て瘦せた肩をいからして威儀を正して出てくるよばよばの老耄ではない。四面余すところなくまだ平家の場合に、孤児で流人の頼朝に自分の娘が仲善くなるのを黙って捨てて置いて、乗るかそるかの大ばくちを打ってから、苦勞に苦勞を重ね、それがうまく当たってから、鰻上りに出世してでっぷりと肥るに到ったが、苦い失敗の経験を山ほど積んだ古狸である。ぎろりと光る目で、伴のような若い者たちを見てから、

「まあ、お前たちで、いいように取計え」

が、これが老人の時世を知らぬところから来た敗北の告白であった。孫の頼家さえも平然として修禪寺で殺させた男が、自分だけは例外と自惚れていたのは、やはり、どこかに若い闘志を欠いた老衰の徴候が出ていたので、いざという際には毒を用いても実朝さえ失いものにすれば後は執権の夫の思うままと、単純に思い込んでいた牧の方が、遙るかに烈しく、事を一途に追及する性質を具えていたものだと言おうか。その性質の方が、どんな時代に合おうが、強いことは言うまでもなかった。

美人で気位の高い牧の方は、苦勞なく執権の妻となっただけ失敗の苦い味は知らず、自らの確信だけが強い。万一の時

は、執権の勢力で人を集め、尼御台も侍所も向うに廻して、歸うばかりだ。可愛がつてやった婿もいる。腹心の家人もいる。大御所にいる尼御台も義理の上では我が子だし、憚るところはない、と信じていたのである。

実朝はまだ十四歳であつた。十二歳で征夷大將軍となり、その翌年十三歳で妻を娶つたのだが、成長の速度が現代よりも早い昔のこととはいへ、まだ、祖父と母親や叔父の間が、こういう不穩な羽目に立到つていようとは感じていない。元服したのもこの時政の屋敷だったし、妻を迎えてからも、ずっとここで暮して来た。今日ここを出れば、二度と、帰ることがないのだとも知っていないのである。

「おた様からのお迎いじゃ」
と言って悦んで支度に掛つた。

尼御台が寄越した阿波の局と云う女房がそこへ入つて来て、簾の外でお辞儀をしてから女たちに言いつけて、若い二人の世話を焼いた。

この女房が、
「御大切なものは仰せくだし置きませ」
と言つた時、実頼は急に顔を見て、
「当分、おた様のところにおるのか？」
と問い返した。

阿波の局は、人に聞かれるのを憚つたように振返つて杉戸が書いているのを見てから、笑いにまぎらして、

「その思召で」

と下を向いて、聞えるか聞えないかに答えた。

実頼は、無邪気に、

「では、歌の本じゃ」

と云つて、洲浜棚の方へ自分で取りに行きながら、急に何を思つたのか、局を振返つて見た。阿波の局は、静かに控えているが、まだ若い顔に、ふとした場合に、きびしく張り詰めている心が現れて少年の目には可怖いような顔が覗くのである。

慧しく実朝は、それを把えたが、その理由を捜るように見えた瞳は部を掲げてある庭前に向い、砂をかきならした前栽に、桔梗の花の紫が絵の具を重ねたようにぼつりと濃いのを茫漠と見まもり、やがて物も言わず、違い棚に置いてあつた歌の本を取つて、
「阿波」

と、持てと目配せした。

十二歳の秋に母の屋敷を離れてから、三年実朝はこの名越にいた。祖父の時政は別として、祖母に当る牧の御方の丁寧でいて、どこことなく冷たい心に触れている間に、自分も警戒して物を言うことを覚えたのである。その最初の折も、尼御台が附けて寄越したこの阿波の局が、牧の御方に害意があると密訴して、移つて来て五日か六日目に急にまた尼御台のところへ連れ戻され、祖父が了解を求めに来て、誓書まで入れて前どおり名越へ来て住むこと

に成った、その小さい行掛りが無心の子供の心にも、拭い切れない影を残していたものであった。

色の白い牧の御方が、実朝にも何となくこわく、子供ごろにも遠慮なしに向い合ってはいられたのであった。

阿波の局は、事態の万一を恐れていた。それは、この場合実朝を渡すまいとして、牧の御方が若い二人を人質のように抑えるのではないかということである。屋敷を義時の手勢で囲んであっても、そう成ると尼御台とて、討てとは下知出来ぬ。頼家が死んでから、実朝は政子が腹を痛めた唯一人の子供だし右大将頼朝の掛替ない忘れ形身なのである。実朝を取られては無事ではいられぬと感じた場合に、牧の御方がこの必死の手段に出ぬとは誰が言えるようか？ 牧の方が実はこれと反対に、この際になっても自ら侍んで未来を樂觀していたとは、阿波の局が夢にも想像出来ないところで、案々と、若い將軍家が出て行くことに成ってから、文殊菩薩の御加護と、思わず手を合したことであった。

渡殿を時政たちのいる棟へ渡って式台の方へ出ようとすると、使者が待っている部屋から離れ、休息の間に時政がただひとりで坐っていたのが見えた。凝然と木像のように庭に向つていて、実朝などの足音を聞いてから、ぎろりと目を動かして見たのである。

老人は自分の運命が行き止りになったのを知っていた。使者も捨てひとりに成ると、絶望の味を口中に嚙んで、人を見ればどなり出しそうに癪癪を募らせていた。眼中に執権職も將軍も源氏もなく、もともと伊豆の土豪だった彼である。

実朝はその前に立ったと思うと、急に声を掛けた。

「じい。じいも一緒に参らぬか」

硬かった時政の顔が急に動き、皺が濃くなり、目がうるんだ。実朝は繰返して言った。

「じいも参らぬか」

その声は、可憐に聞えた。

時政は実朝におのれの孫を見、六十八歳にも成った長い一生を剝那に思い、危く落涙しようとして、遽かに嗔れ声を揚げて胴太く、言い張った。

「御前、ひとり行かれて相州に仰せられよ。時政の爺が、やがて、親不孝者に灸を据えに罷り越すとな。用意に不念はないかと仰せられい」

若い將軍夫妻を載せた輿をつつんで義時の手勢が立ち去ると、この名越の御所には八方から一族郎党が駈け集って来て、内外ともに混雑した。

誰に話しているのか、牧の方が興奮した声で、尼御台の尊いのは承知であるが、後添の母じゃと思うて我を侮る、と言う声も時政の耳に聞えて来た。時政は可怖い目をして、いつまでも、ひとりで、そこにいる。人が来れば睨んで斥けるくらいで、黙然と腕を拱き、時折は太い息をして、切なげに肥った肩を揺り上げ、夕闇の色が屋内に立つ時分まで、他人の前には姿を見せなかった。

老人は、まだ屈伏しまいとする意欲を残していた。ここまで時政が生きて来たのには、もう、今はこれまでと自分を思つたよう

な苦しい刹那を、幾度か睨んで通つて来ていたのである。老いたが、度胸のことともなれば鍛えに鍛え上げられていた。

それと、自分と牧の方とが、行く末は娘の婿の平賀朝雅を將軍に立てたいと企てて来たことは、気配には人に感じられたとしても、尻尾をつかまれるような拙いことはしてない筈で、老獪にそんな話があるか、俺れは知らぬぞ、と口を拭つて言切れぬようなものでない、とも考えられるのである。なるほど、年とってから出来た娘の婿は可愛い。が、権中将どの（実朝）も私の孫で、右大将（頼朝）が遺した唯一の形身じゃ。烏帽子親とも成つておるし、嫁の世話を俺れたち夫婦でしておる。世上で、どんな取沙汰をしておるか知らぬが、お前らまでが親の俺れの肚を搜るような真似はせんでよい。

権中将どのは孫で、尼御台も、義時も、自分の子供なのだ。二人の嫌疑に對して、立派にこう言つて通ることではないか？

こう考へて、時政が宙にきびしく見据えた瞳が、やや緩むかと思へると、それがまた一層暗澹とした色を帯び、身の置きどころもないように焦躁して来ていた。これまでの永い過去が一瞬にして、時政の脳裏に閃くのである。その時、この場合、あらゆる足掻きが無駄だと見えて来たのである。尼御台も義時も、我が子であつて、後妻の牧の方が入つてから、年々、間が冷やかに成つて来ている。実朝に妻を貰う時、義時は自分の姪に當る足利義兼の娘を入れようとしたのを、自分は牧の方の縁故を頼つて京から貰い受けるようにした。新しく將軍に成るひとを自分たちの勢力下

に置きたいという秘かな願望があり、義時にまた、歴然と、その意図があつたのである。

畠山父子を誅戮した時が、それだった。あれは、自分たちの女婿、平賀朝雅を六郎重保が京で辱しめたのが原因で、勝氣の牧の方が、是が非でも畠山父子に報復しようとしたのだ。重忠にも自分の娘をやつてあるので、後添としては、一層、我慢ならなかつたと見え、俺れにも撫めきれなかつた。そこへ重忠と日頃不和の稲毛入道が加わつて、畠山に謀叛の志ありということに成り、義時を動かして誅戮の手配をした。義時の奴が引受けて行つて、事を了つて戻つて来ると、俺れの前へ出て、畠山は氣の毒であつた。あれは、為にする者の讒訴と思われると、親の俺れを憚らず露骨に云つたばかりではない、これを見よと云わぬばかりに、俺れには一言の断りもなく、稲毛に兵を向けて一族を首にしおつた。俺れの顔はない。彼奴は俺れが何も言えぬと知り抜いておつて、ぬけぬけと、それをやつた。若い頃は、遠慮も優しいところもあつた奴だが、いつの間にか、増長しおつて、親を親とも見ぬ。それに尼御台がおる。昔からきかぬ氣の奴！俺れが山木判官に嫁にやることにしたのに輿入れの夜に逃げて伊豆山へ逃げ込み右府（頼朝）のところへ突走つた。源氏の嫡流とはいへ、流人と成つて頼る者もなく比企の尼の仕送りを受けて生きている人間のところへ、だ。俺れがまだ元氣なさかり、相手が源家の嫡流ならば、どうなることか知らぬが、それも面白かうと、大きな博打を打つ氣で乗出して、今日の天下を築き上げたが、あれが右府

さえ迷惑していた強い女で、頼家が比企の勢力を頼って我が一族を斥けようと企てたのを知らせてくれたのは俺れの娘らしい仕打で有難かったが、病氣と触れて修禪寺に押込めて置いた頼家を俺れが手を廻して亡い者にしたことを感附いてから、俺れを疎んじ始めた。兄を殺させた親だから、弟の実朝も害うつもりだろう。

尼の、この邪推から今日のことが出ている。腹を痛めた子供の中で、たった一人残った実朝だから、あの男まじりの氣丈者が、女親の本性を見せ、前後を忘れて今日の沙汰に出た。後添の母を日頃からうとましく思っている彼じゃ。義時めが同じ肚。俺れが威勢を失くせば天下は彼のものと成ることは自明。それを吞込んでおって、親切顔に姉の尼に有ることないことを耳打ちする。

一步一步、淵の深みへ沈んで行くように暗かった。やがて絶命の運命の前に立つ。さぐるようにそう感じて来てから、おのれも愕然とした。

味方に附く者は誰れと誰れか？ 現在、誰れがここに来ていいのか？ あわただしい思案の中にも、のっぴきならず実朝を引渡して了ったことが悔まれた。実朝を抑えて置くのと手放したのでは、源氏の譜代の家来が味方となるか敵となるかの大きな相違がある。義時が、それも計算に入れて、こちらの不用意に乗じ、今日不意と姉を動かして俺れを身動きならぬ羽目に追込みおった！ 親の俺れをだ！

実朝の兄で前の將軍だった頼家の不幸な最期のことは、嚴重に秘密に執り行ったことだったが、源氏譜代の者が漸く時政に嫌疑を向けて来ていたのである。その今日に、時政が女婿を將軍に立てようとして実朝に害意を抱いたと伝えられれば、乾いた枯草に火を点けるのも同然のことなのだ。有らぬ罪名を着せて頼朝以来の重臣の畠山父子を殺させたという事実も、謀叛と言い立てて通ったものを、その後の義時の露骨な言動で覆されたのである。

時政に取ってあらゆる条件が不利だった。親だから、よう手を出せまいとは言えない。殺させた頼家は自分の孫だった。畠山重忠は娘の婿だった。それから今日、実朝を迎いに来た乳母の阿波の局は、やはり自分の娘だったが、その夫だった阿野全成を、頼家を殺す以前に、やはり自分が殺させている。過去の債鬼が、一度に集って来て、決算を求めているのである。

若い牧の方は、まだ、そこまで危機を感じていない。執権の妻として、まだ自分が人を動かして得る高い椅子にいと信じていた。時政がいるところへ入って来ると、ただ自分たちを無視した尼御台の仕打に恨みを述べ、

「都に使いをやって朝雅どのにも知らせねばなりますまい」と言った。朝雅は、牧の方が目もなく可愛がって、心頼みとしていた女婿である。

時政は、短気らしい表情を閃かしただけで、それに答えず、声まで喰れて、今、誰々が来ているかと尋ねた。あせている老人が決して満足出来るような返事は聞けなかった。誰々にすぐ出て

来るように迎いにやれと言いかけて、時政は、その人間の来ぬ場合の失望の味まで深く感じた。

牧の方は笑って恨み言を言った。

「また、阿波のお局が要らぬことを言い立てて、私を困らせようとなさるのでしょう。仮りに義理の母の私を、ごきょうだいの皆さままで、憎んでお虐めになるのはどうしたわけで、御座いますよう？」

老人は一層、苛立った。烈しく何か言い立てようとして、若い妻の冷たいように白い顔の表情に触れると、年齢はそう違わない尼御台政子の、冷静でいて、周囲が何を言おうが、自分が持つて行こうとしたところへは必ず事を納める烈しい意力のことを思つて、政子から受けるともこの若い妻から受けるともつかぬ変な圧迫を感じて本能のように顔付を固くするのだった。牧の方の父親が、頼朝に髻を切られて、時政もこの侮辱に立腹して暇乞もせず鎌倉を離れ伊豆の北条へ引籠ったことが昔あった。その原因は政子の嫉妬だった。頼朝に政子に隠れて愛姫があり、伏見冠者広綱の家に置いてあったのを、政子の言いつけで牧の方の父親宗親が広綱を責めに行き、そのことが頼朝の耳に入つて、頼朝が仕様もあらうにと怒つて、物も言わず宗親の髻を切ったことがあつて、騒動だったのである。その頼朝が政子の烈しさには、面と向うとあたらず障らずの態度だった。

その時代よりも年も取った時政は、目をつぶつて無言でいたが、やおら、目をあいて牧の方を見ると、

「まだ、命は惜しい喃」

と、一語言つて出た。

「当分、伊豆へ入つて、凝としていよう」

「何を仰せられますか」

と、牧の方が色を変えて言うど、

「いや、可怖い、可怖い、暫く、目をつぶつておることじゃ。不

孝者も、親がおとなしくしている分には、手も出せまい」

奥の手は、最愛の女婿のことを言い出して、牧の方の心を動かすことであつた。抑えようもない思い上つた女の野心を。

「朝雅も、なるべく憎まれぬように、こちらで心を配らぬと。凝としてさえおれば、俺は、尼にも相州にも親じゃて」

好々爺らしくさえ見えた。七つ命があつても足りなからうと自分も考へて今日まで生きながらえて来た男が、——娘の尼御台政子が、たった一人残つた夫の忘れ形身実朝の命の爲には、現在の親をも殺しかねまじき形相となる。それと同じことで、娘の婿平賀朝雅の出世の爲には、身をも世をも捨てようとする、氣位の高い女の盲目な熱情をどう鎮めるか、六十八歳の男はそれを考えたのである。

「伴どもに、したいとおりにさせてやろうて。親じゃ。おとなしくしているものに、やればやって見い。えい、黙つておれ、黙つておれ。下手をまごつくと、朝雅の身に及ぶ。婿が可愛かつたら、黙つておれ。伊豆へ引籠つて神妙に経でも写して暮らしてな。はは……永い辛抱ではなからうが」

一方、伴の義時は、名越の御所と言われていた父親の腹心の者だちで、この日も向うへ出頭した旗頭の面々が、その帰り道か、夕方にかけて、自分のところへ間違わずに集って来るのを見とどけた。心中、にこりとしながら、彼らに向けて如何にも無愛想であった。

姉の尼御台、政子の前へ出ると、きっぱりと覚悟のほどを言った。

「已むなくば」

それから、余裕もある声の調子で、

「孫といわず、子といわず、父上も、したたかに、おやりなされましたなあ、最早、後世のことをお考え遊ばしたところで、齡に釣合わぬことは申されぬ」

政子は、他のことは違い、ただ一人残った子供のことであったので、実朝の顔を我が目で見えるまで安心出来ないでいた。

「お寄越しやるかな？」

義時は、たくましく笑って、

「父上とて、間違えば御破滅と御覧じたら、うかとはなさるまい」

「いえ、牧の御方が」

「こりや、話ではない」

女。——聡明さを世に伝えられている姉の前だったが言外に軽蔑の意を含めて、平然とした顔付であった。義時は今日のことが片附いたら、すぐに手配して人を京に遣り平賀朝雅（牧の方の女

婿）の首を挙げる心づもりである。この姉にもそれを明されぬ。ただ事後に報告するだけのことである。それは実朝の無事な顔を見たら、気丈の姉も急に女らしく、涙もろくそうまでせいでもよいと言いつすに違いないからである。しかし、父時政の野望の因が平賀朝雅に在るとすると、義時が見て、これは当然の処置であった。二度とそういうことの有り得ないように今から備えて置くのである。

当の実朝は、何も知らずに、輿に乗って名越を出てから町の様子にただならぬものがあるように感じて来た。

町は透きとおるような秋の光を浴びて物の影が黒い。その築地の蔭、寺の門前に、鎧武者が屯（くも）っていて、実朝の輿だと見ると、急に何か囁き合い、弓矢を伏せて見送るのである。気がついて見ると、この白昼だというのに、どの町家も表の戸を閉めてあって、空家のようにひっそりと鎮まり返っていた。女や子供の姿は見えない。偶に町の男を見かけると、これは、征夷大將軍の行列と見て、道を避けて道路の脇に隠れているのだが、その顔色にも異様に静かな、物に怯えたような空気がある。離れて眺めても敏感な心に伝わって来るのである。実朝が何かあって外へ出る時の楽しみの一つは、自分の周囲にいる武士とは違う町の男女の、明るい無邪気な姿を見ることが出来ることだった。自分が通る為に、つましく見送っているのだが、簡単に驚いたり、笑ったり、遠くから走って来たりして、いきいきと動いている姿が、故意のようにものものしくしている侍たちとは違い、見まもって